案外知らなかった越谷をあるく

第400回史跡めぐり・新田から蒲生へ

日 時　平成22年2月28日(日) 雨天決行

集 合　午前8時30分 東武線 新田駅東口

コース　新田駅→

蒲助河岸(大正2年頃が全盛期)

蒲生一里塚(唯一県内日光街道に現存)

蒲生茶屋通り(妙利道供養塔など)

清厳院(山門の龍の彫刻)

光明院閻魔堂(蒲生村・旧家の墓地)

光明院(真言宗豊山派・阿弥陀如来)

児童館ヒマワリ(ミニ水族館)→

蒲生駅(12時解散予定・歩行約4km)

ご案内　常任理事 安西利夫

参加費　500円(資料代、保険料)

平成22年2月28日(日)

案外知らなかった越谷をあるく

第400回記念史跡めぐり・新田から蒲生へ

NPO法人越谷市郷土研究会

蒲生茶屋通り「是より大さがみ道」

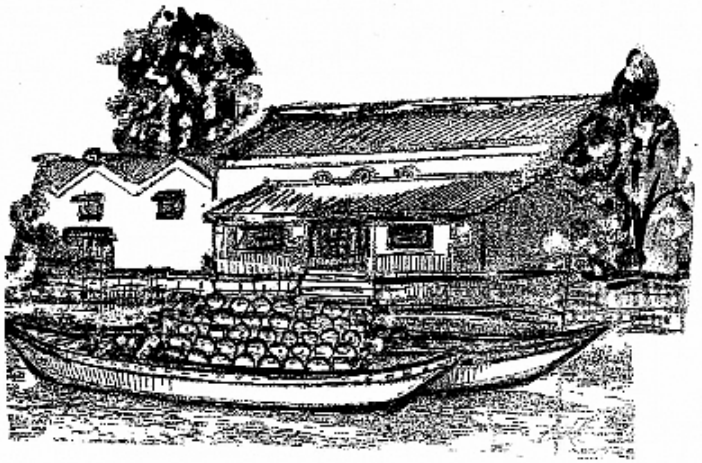
○藤助河岸跡

綾瀬川の藤助河岸は、高橋藤助氏の経営によるもので、その創立は江戸時代の中頃とみられている。当時、綾瀬川の舟運はことに盛んで年貢米をはじめ商品荷の輸送はここに集中していた。それは1680年に幕府が綾瀬川の用水引水のための堰止めを一切禁止したので荷の積み替えなしに江戸へ直送できたからで、以来ここには数多くの河岸場が設けられていった。明治に入り、政府が河川や用悪水路普請に対する国費の支給を打ち切ったので、中川・古利根川・元荒川に土砂が溜まり、大型船の運航は不可能になり、舟運は綾瀬川に移っていった。

このなかで旧日光道中に面した藤助河岸は地の利を得て特に繁盛し、1913年には資本金5万円の武陽水陸運輸株式会社を創設した。当時この河岸からは、越谷・粕壁・岩槻などの特産物(米穀類,わら製品、味噌、醤油,ゴマ油、蓮菜類、白木綿)が荷車で運ばれ、高瀬舟に積み替えられて東京に出荷された。年間出荷高1万8千駄、着荷高2万駄に及んだという。

しかし、東武鉄道は明治32年(1899)に北千住～久喜間で営業を開始しており,沿線に停車場が順次つくられ,大正8年には越ヶ谷町と東武鉄道が貨物輸送の契約を締結した。

更に、武陽水陸運輸会社は、大正12年の関東大震災で、持ち舟の大半を破壊され急速に衰退していった

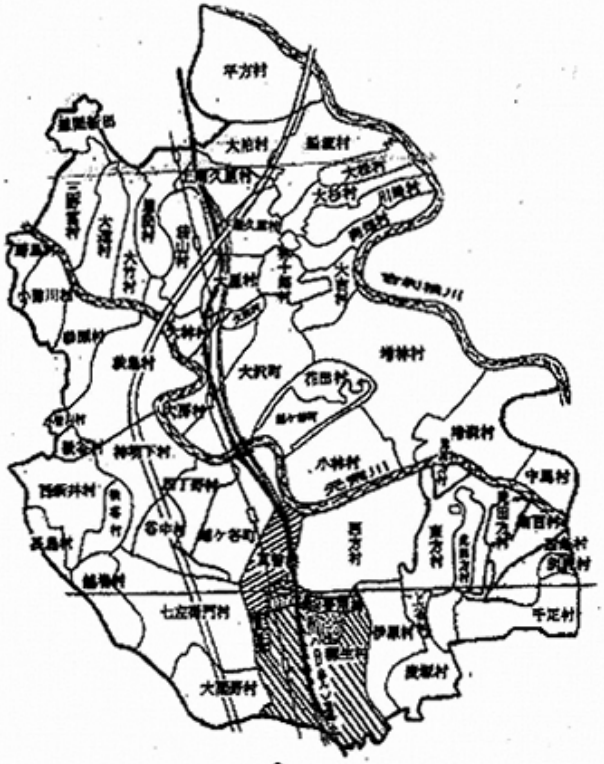


○越谷の地勢と風土

越谷市域は5000年前は海の下にあった。そのため、この地域には台地も谷もない。約3000年前から、地球の気温が現在のように下降し、海が後退していった。同時に利根川(古利根川)、荒川(元荒川)、綾瀬川(古綾瀬川)が上流から土砂を運び陸化が始まった。これらの河川の湾曲した所に冬の季節風が吹きつけて、自然堤防がつくられ、その上に集落が形成されていった。

越谷市一帯は武蔵野台地と下総台地の間に挟まれた沖積低地である。ここに広大な水田地帯を潤す末田大用水・須賀用水・葛西用水があり、この葛西用水から四ヶ村、谷古田、東京葛西、八条の各用水が分流し美しい水郷の景観をつくっている。

このような地勢から、越谷の人々には、平坦な地形と温和な気候に恵まれて、平凡ながら穏やかな且つ温雅な気性が育成されたと思われる。

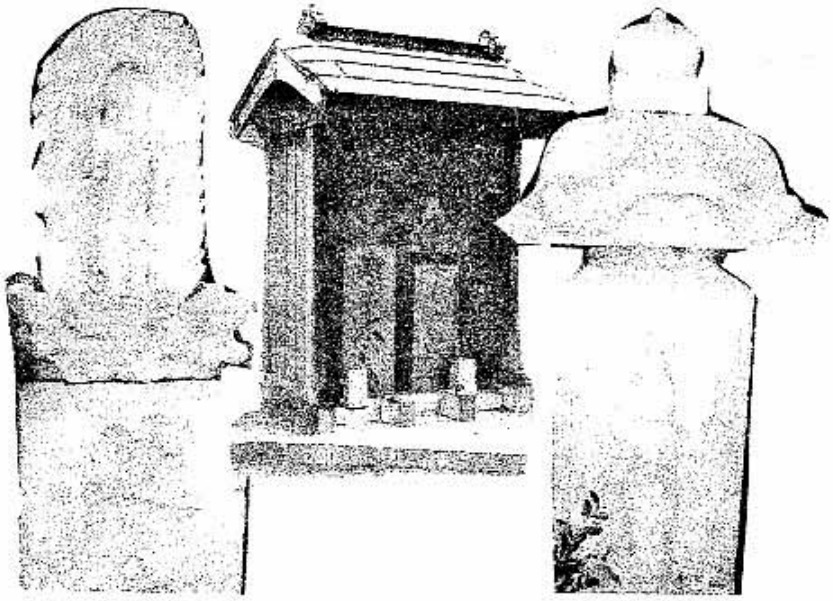


○蒲生茶屋通り

上茶屋・下茶屋とあり、草加の茶屋通りと繋がる。此処は草加宿と越谷宿の中間に当たる日光街道沿いの地で、旅人や人足・駕籠かきなどが休息するための御茶屋が設けられていたことから名付けられた。このような所を「立場」または繼立場とか継場という。「間の宿」などは、立場が発展したものである。

○ 茶屋通りの道標

旧日光街道の蒲生片町焼米茶屋、その茶屋組より奉行地への入口に二体の石仏が安置され、そのうちの一体が通称「不動さま」といわれ、台石の表面に「是よ里大さがみ道」と刻まれ、右側に「享保十三(1728年)戊申九月二十八日」、左側に「施主江戸新乗物町講中」とある。江戸の人々が大相模不動尊に参詣する時の道標として、駕籠屋などの関係者が先祖の供養を兼ねてたてたものと思われる。もう一体は笠付庚申塔で、江戸時代の人達が疫病などの侵入がないよう念じてたてたものといわれている。

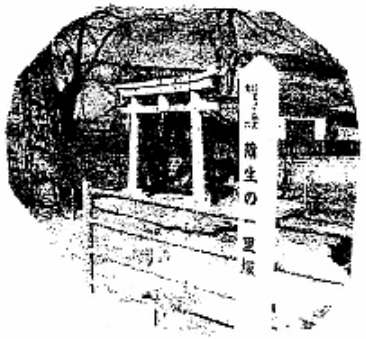


○蒲生の一里塚（埼玉県指定史跡）

一里塚は、江戸時代街道沿いに一里毎に設置された塚で、塚の上にエノキ・マツ・スギなどを植えて,道程の目標や人馬賃銭の計量の目安に、また旅人の休息の場などに用いられたものである。

1804～1818年間に幕府が編纂した「五街道分間延絵図」には、綾瀬川と出羽堀が合流する地点に、日光街道を挟んで二つの小山が描かれ、愛宕社と石地蔵の文字が記されていて、「蒲生の一里塚」が東西に一基づつ設けられていたことが分かる。現在は、高さは2メートル、東西幅5．7メートル、南北幅7．8メートルの東側の一基だけが,絵図に描かれた位置に残っている。

また、塚の上にはムクエノキの古木、ケヤキ、マツ、イチョウが生い茂っている。多くの塚が交通機関の発達や道路の拡張などによって姿を消した中にあって、「蒲生の一里塚」は埼玉県内の日光街道筋に現存する唯一の一里塚である。

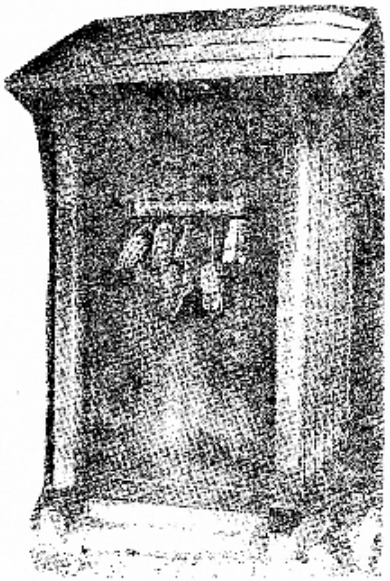


○愛宕社（蒲生愛宕町）

創建年層不詳であるが、一里塚が築かれた後、創建されたとおもわれる。また綾瀬川の対岸の新田側にも同規模の愛宕社が創建されている。祭神は迦具土命（カグツチノミコト）、下茶屋氏子により守護されている。

○ ぎょうだい様(砂利道供養塔)

蒲生一丁目(旧大根家跡の道路脇)に蛙か、鳥か、河童のような得体の知れない石塔がある。その台石に「砂利道供養」と刻まれ、裏面に宝暦7年(1751)丁丑6月の石塔建立年月と多くの造塔者名が刻まれている。地元の人々は、これを「ぎょうだい様」と呼ぶほかに「おかま様」または「ぎょうじゃ様」とも呼んでいる。石塔はこの年に日光街道大修理が行なはれ、街道に砂利が敷かれた記念碑である。その規模は幕府から5千両の恵貸があり、普請人足が八条領34ヶ村・谷古田領15ヶ村・赤山領5ヶ村・越ヶ谷領5ヶ町村・岩槻領5ヶ村・新方領11ヶ村から動員され、食糧支援に協力した村として金右衛門新田・七左衛門・松伏・大吉・下赤岩・増林・末田・野島・小蒲袋・幸手・柏壁の銘が刻まれている。また、この「ぎょうだい様」は道路や交通の神様として崇められて草履などが供えられている。



○清蔵院の山門（越谷市指定 有形文化財）

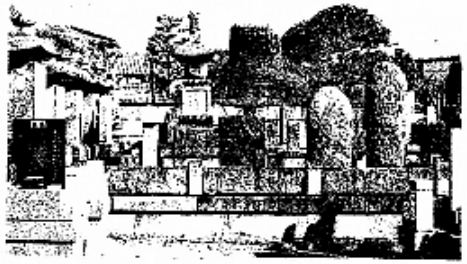
1534年開基と伝える。この山門は部分的に改修されているが、その棟札により1638年関西の工匠による建立が確認された。ことに、欄間に掲げられている龍の彫刻や紅梁の彫刻などは江戸初期の素朴な様式をうかがわせている。

なお、この山門の龍は伝説では左甚五郎の作ともいわれ、夜な夜な山門を抜け出して畑を荒らしたため金網で囲ったといわれている。多分、日光東照宮造営に動員された工匠が、日光街道の往復の際に寺に世話なり一夜で彫ったと伝えられる。

越谷では数少ない江戸時代初期の建造物として、また、日光東照宮造営にまつわる伝説を残す資料として貴重なものである。

○光明院閻魔堂

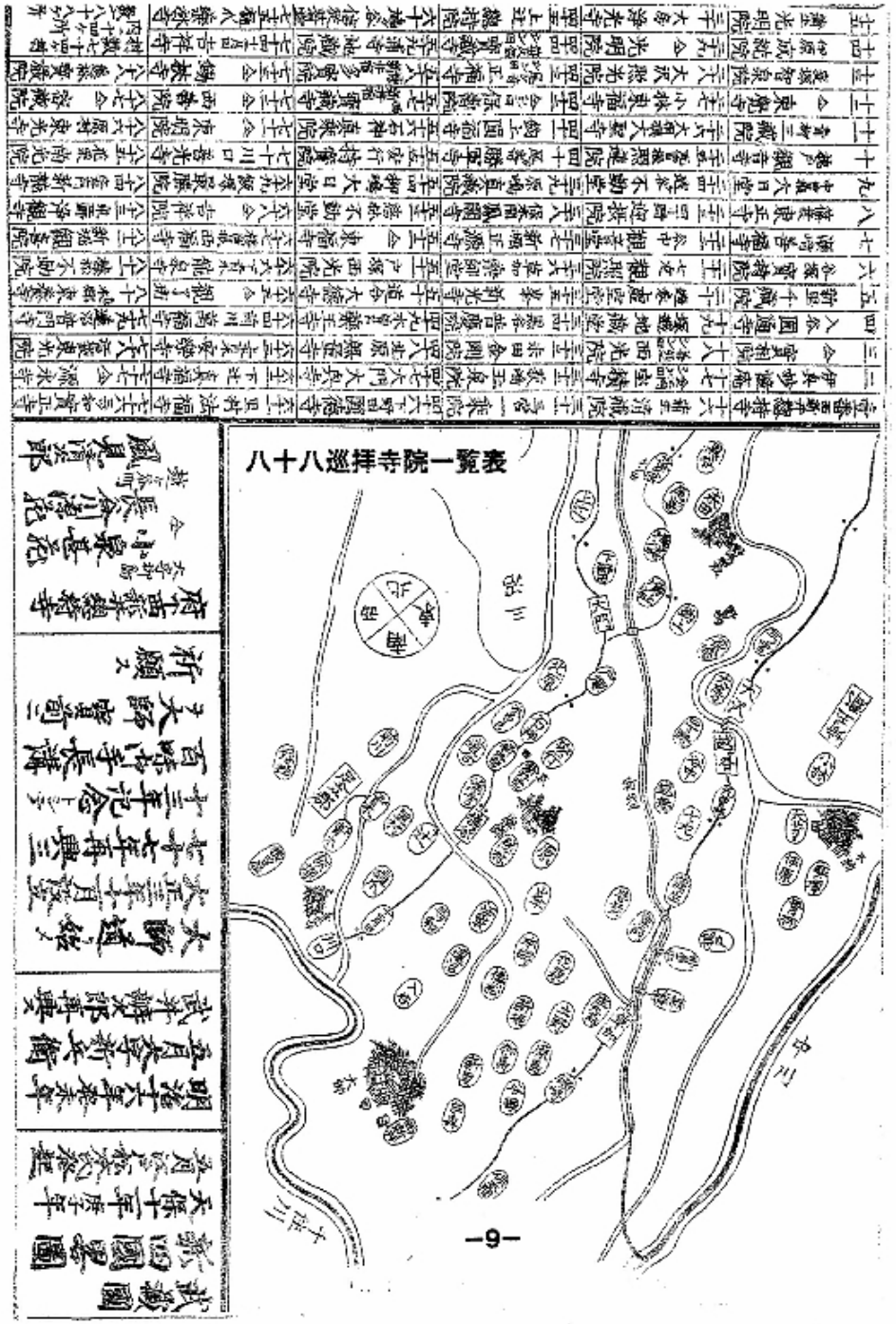
蒲生村東組名主・大熊家をはじめ植竹，遊馬など地元旧家の墓石が見られる。中でも1625年、1646年の宝篋印塔などがみられ、風格のある祠堂である。



○光明院（真言宗豊山派）遍照山西度寺

本尊は阿弥陀如来、 開山 栄善 寂年を伝えず。1556年に興立すとつたえる。境内には、明治17年、蒲生村、大熊治右衛門などによって始められた「三群送り大師」を記念した明治36年銘の巡礼供養塔が建立されている。これには、一番の西新井総持寺に始まり、八十八ヶ所の巡拝寺院の番号と寺院名が刻まれている。光明院は15番、清蔵院は16番、地蔵院は掛所となっている。巡拝寺院の範囲は足立区、川口、草加、鳩ヶ谷、浦和、越谷の各市に及び、農閑期に巡拝する信徒の姿がよく見られた。 本院は、閻魔堂にくらべて、新しい墓石が多いが、歴代住職の墓所には1633年と1649年銘の宝篋印塔の墓石が見られる。

○送り大師　大師講の集まりが、大師像(お姿)を持ち、寺から寺へ、有力信者宅へと持ちまわる行事。寺では、日程に基づき、檀家からお握りの提供を受け、集まった善男・善女に振舞った。装束は揃いの襟掛けを付け、寺の本堂で念仏踊りを披露し皆で楽しんだ。



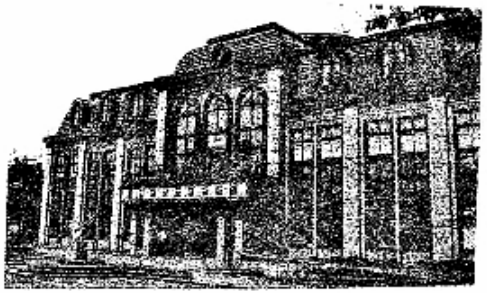
参考資料

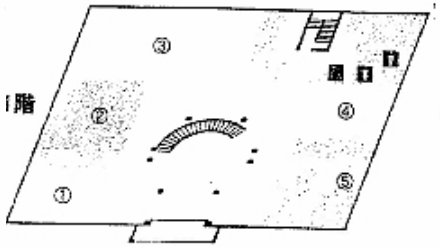
ふるさと蒲生の歴史ものがたり「上」
越谷自然探訪　越谷市市民生活部
綾瀬川と藤助河岸　高橋正澄氏資料
蒲生地区の石仏　加藤幸一氏資料
郷土越谷散策マップ　越谷市観光協会
こしがや案内図　越谷市広報広聴課
都市地図「越谷・吉川」　昭文社
児童館ヒマワリ　パンフレット
フリー百科事典「ウィキペディア」

○児童館ヒマワリ

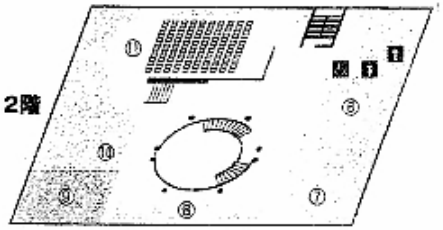
「施設の目的」 児童福祉法に基ずく児童厚生施設であって、子どもたちに健全な遊びを提供し健康を増進し、情操を豊かにするために設置された施設です。

「生物と環境」をテーマに、ミクロの世界を観ることができる電子顕微鏡やトマトの水耕栽培コーナー，生物・環境科学展示コーナー，淡水魚が観察できるミニ水族館、200インチの大型映像が楽しめる視聴覚ホールがあります。

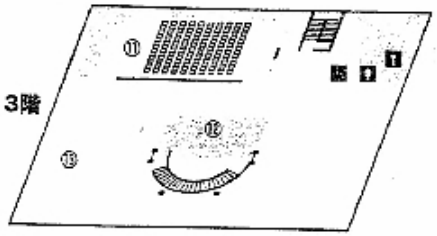




●1階　～頭と体を使って遊びを創造～



●2階　～手を使い、体験し、未知のことに挑戦～



●3階　～見て触れて試して新鮮な驚きを体験～